

---

# 七両目のリンゴ

A Q

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七両目のリンゴ

### 【Nコード】

N0050Z

### 【作者名】

AQ

### 【あらすじ】

「内気な私の初恋は、三角関係で出発。終着駅はどこ？」  
電車というお題で書いた、少女漫画風の恋愛短編です。ケータイ系サイトの企画向けに考えました。このキャッチコピーでお分かりのとおり、糖度高めの身悶え系……古き良きピュアな少女小説の世界をご堪能ください。

「だから、真由ちゃんはカワイイんだって。自信持ちなよ！ 司もそう思うよねっ？」

そんなに大きな声で言わないで……。

私は顔を伏せ、できる限り猫背になってみた。首に巻いたマフラーを鼻の下まで引っ張り上げて。

でも白いマフラーじゃ逆効果。リンゴみたいに赤く染まったこの顔が、余計目立ってしまうだけ。

結局マフラーを解いた私は、その眩しい白を見つめて溜息を一つ零した。

後悔したって仕方ない。これは自分で決めて買ったモノだから。

私には似合わない、ふわふわ綿帽子みたいなマフラー。少しでも

“雪ちゃんっぽく” なりたくて選んだ……。

「ねえ、司ってばっ！」

「……ああ、うん、そうかもな」

雪ちゃんにしつこく促された司君が、曖昧に頷く。

私の方には、一切目を向けずに。

「ちよっと司、この際だから言わせてもらっけどねえ」

「アホ、お前は黙ってる」

司君は、雪ちゃんのおでこにコツンと拳骨を落とす。「痛っ！」

と大げさに騒ぐ雪ちゃんを、他の乗客が気にし始めている。『見ろよ、あそこに可愛い子がいる』なんて、ヒソヒソ声が輪唱する。

揺れる電車の音よりも、うんと小さな声を拾ってしまう私の耳は、いわゆる“地獄耳”だ。その話をしたとき、雪ちゃんは「地獄耳じゃなくて、うさぎ耳だね！」と笑ってくれた。でも、どう見たって雪ちゃんの方がうさぎさんだと思う。

雪ちゃんは、私の理想をギュッと集めたような女の子。背が小さくて、目がクリッと大きくて、肌は雪みたいに白くて、栗色の猫っ

毛は柔らかで。真つ黒ストレートヘアで淡白な顔立ちの私が日本人形なら、雪ちゃんは西洋のお人形。セーラー服の赤いリボンが良く似合う、パーフェクトな美少女。その上明るくて優しく、皆の人氣者。

そんな雪ちゃんと仲良くなれるなんて、夢みたいで……。  
なのに今はちよつとだけ、辛い。

\*

あれは忘れもしない、入学式の日の放課後。

内気な私にはその日友達ができず、一人寂しく帰り支度をしていた。「誰か話しかけてくれないかな」なんて他力本願な期待が、作業の手をいつもよりスローにさせる。

神様は、ささやかすぎる私の願いを叶えてくれた。

突然教卓の前に立った雪ちゃんが、クラスメイト全員に向かって凜とした口調で問いかけた。

「アタシンちつて春咲町なんだけど、誰か同じ方向のひと居ない？」  
春咲町といえば、私が乗る電車の終着駅だ。うちの最寄駅はもっと手前だし、途中から各駅停車に乗り変えなきゃいけないけれど、急行で二十分くらいは重なる……。

「うち田舎だし、通学時間長くて退屈なの。同じ電車だったら一緒に帰ろうよ！」

その提案に皆色めき立った。遠巻きに見ていた雪ちゃんと、正々堂々お近づきになれるチャンス。

もちろん私も例外じゃなくて。

気付いたら、蚊の鳴くような声が唇から零れて、ふわんと雪ちゃんへ飛んでいた。

「あの、途中までで良かったら……」

「やった、女の子が居た！ 確か伊藤真由ちゃんだよね？ よろしくっ」

私の元へ駆け寄ってきた雪ちゃんが、有無を言わず強引に握手してきた。大きな瞳を煌めかせながら、屈託なく笑いかけてくる。つられて笑みを返したとき……敏感な耳が、ハスキーな低い声をキヤツチした。

「おい、帰ろうぜ」

声の主は、一人の見知らぬ男子だった。教室のドアに手をかけ、中を覗きこんでいる。

身長百七十センチの私より、さらに頭一つ分くらい背が高い。少し長めの前髪と、冷たそうな切れ長の瞳……その目が、私の方を見てふっと優しげに細められた。

正確には、私の正面に立つとびきり可愛い女の子を見て。

雪ちゃんは、私を捕まえていた手をするりと解くと、彼に手招きした。

「ねえ司っ！ 旅の道連れ見つっちゃった！ 真由ちゃんだよっ」

「あー、キャンキャンうるせえっ」

教室の入り口から、長いリーチでほんの数歩。近づいてきた彼が、至近距離から私を見下ろしてくる。

「ふーん。道連れ、ねえ」

男子とろくに会話をしたことが無い私に、容赦なく浴びせられる彼の鋭い視線。逃げたいのに、足がすくんで動けない。地面にポタリと落ちるリングゴみたいに、心ごと彼に引き寄せられてしまう。

「マユって、どんな字書くんだった？」

「お父さんみたい……」

「はあっ？」

うつかり呟いた私の声を、雪ちゃんも彼も聞き逃さなかった。次の瞬間「確かに司オッサン臭いしっ」と爆笑する雪ちゃん。平謝りの私。

本当は「うちのお父さんみたいに背が高いね」って言いたかった。少女漫画に良くある、向かい合った男女の告白シーン。女の子の方がアゴを少し上げて上目遣いになるその姿勢は、身長がコンプレ

ツクスの私にとって憧れのシチュエーションで。  
そんなひとに初めて出会ったから、驚いたの。  
……なんてこと、知らない男の子に言えるはずがなくて。  
上手く言葉が出ずに赤くなるばかりの私に、彼は「もういいよ」  
と苦笑し、大きな手で頭をポンと叩いてくれた。  
その心地良い重さを感じながら、私は思った。  
ああ、このひとが雪ちゃんの彼氏だったらどうしよう、って。

\*

幼なじみの雪ちゃんと司君、そして私。  
三人で帰るようになってから、初めての冬がやってきた。  
ときめく春、うちとけた夏、穏やかな秋。各駅停車のように、ゆ  
っくりと芽吹き、枝葉が伸び、色づいてきた私の初恋。  
なのに、冬が来ても花開く気配は無く……むしろ、蕾のまましお  
れそうな予感。

「だいたい司は昔っからさあ」

「雪っ、それ以上言うならその口縫うぞ」

「へー、やれるもんならやってみなっ」

ファイティングポーズを取る雪ちゃんを前に、司君はうつと呻い  
て後ずさる。こう見えて雪ちゃんの特技は空手だから、人は見かけ  
によらないと思う。普段はコワモテな司君も、バトルモードの雪ち  
ゃんには敵わない。まるでうさぎにあしらわれる大型犬だ。

こうしてじゃれ合う二人を、ずっと微笑ましく見守ってきたのに、  
今の私は卑屈な気持ちにしかねない。手にした白いマフラーを持  
て余しながら、私は窓の向こうに流れる景色を見やった。

「お似合い、かあ……」

二人には聴こえない、微かな呟きを落とす。

数日前、いつものように教室を出る私たちに向かって放たれた、

誰かの囁き声。それは私にしかキャッチできないくらい密やかで……小さな棘を含んでいた。

『雪と司君ってホントお似合い。伊藤さん、良く邪魔できるよね』それからずっと、胸が苦しくて。

以前、思い切って雪ちゃんに尋ねたときは「違うよ、こちらは単なる腐れ縁!」と笑い飛ばしていた。それでも周囲から“お似合い”と噂されていることは、本人たちも自覚しているらしい。入学当初は火消しに躍起になっていたけれど、最近は諦めてしまったようだ。

でも、噂したくなる皆の気持ちも分かる。間近で見ている私には、二人が長年紡いできた心の絆が痛いほど伝わるから。

それが、運命の赤い糸のように思えて……どんどん胸が苦しくなっていく。

いつそ、二人が本当に付き合ってしまった方がいいのに。

私はさりげなく、別の電車に乗り代えてあげるから。

各駅停車に乗って、一人で帰るから……。

「どしたの? 真由ちゃん。ぼーとしちゃって」

雪ちゃんの声で、私は夢から覚めたように瞬きする。電車の速度は緩やかになり、窓の外には見慣れた乗り換え駅の看板。

それでもぼんやりしたままの私に、司君が珍しく早口で声をかけた。

「真由、降りるんだろ? 早く行けよ」

厚手のダッフルコート越し、背中を押してくれた優しい手のひら。触れてもらえたことが嬉しくて、でもそれ以上に悲しくて……私はさよならも言わずに、開いたドアから飛び出した。

そうだよ。邪魔者は、早く消えなきゃね。

勝手に潤んでくる視界。それをごまかすようにホームを走り出した私のローファーが、改札前で急ブレーキをかけた。

首筋を撫で、長い黒髪を舞い上げる冷たい北風。

「マフラー、忘れた……」

とつさに横を向くと、急行は発車寸前。  
私はもう一度、その電車で飛び乗った。

\*

本当はずっと、こうしたかった。

私が先に降りた後、二人がどんな風に過ごしているのか見てみたかった。

もしかしたら普段とは別人みたいに、甘い声で囁き合っているのかも……。

二人が居るのは八両目。ドクドクと激しく自己主張する胸を抑えながら、私は車両を繋ぐ重いドアを開けて進む。その度に、ギイギイと悲鳴に似た轟音が鳴る。いつもなら耐え切れず耳を塞いでしまふところなのに、今は気にならない。

それくらい、私のアンテナはまだ見ぬ“恋人同士”の二人に向けられていた。

ついに、最後のドア。

この扉を開けたら、全てが終わる。

土壇場で吹きつける、冷たい臆病風。私は腰をかがめ、分厚いガラス窓の向こうをそっと盗み見た。

二人は、ドアを隔てたすぐ傍に居た。

ネガティブ過ぎる私の予想は外れ、二人は相変わらず楽しそうにじゃれ合っている。思わず胸を撫で下ろしかけたとき、微かな違和感を覚えた。私はもう一度、曇りガラスの向こうに目を凝らした。

「あれ……？」

ガタンゴトンと電車がバックミュージックを奏でる中、古い無声映画のようにコミカルなやりとりをする二人。くるくる立ち位置を変える雪ちゃんと、必死の形相で手を伸ばす司君。

雪ちゃんが背中に隠しているのは、ふわふわの白い塊。あれはど



う見ても、私のマフラーだ。

いったい何をしてるの？

好奇心が、少しの勇気へと変わった。

震える指先に力を込め、ドアをスライドさせる。ほんの数センチの隙間でも、私の耳には充分。

聴こえてきた会話は……。

「雪！ 返せよ！」

「やーだよつ。ヘタレな司なんかに、コレはあげないっ」

「俺が拾ったんだぞ！」

「ハイハイ、真由ちゃんがコレ落としたのに気付いて、わざと言わなかったんだよね？ そんなことを“キツカケ”にしようなんてヘタレ過ぎ」

「お前、俺の味方じゃなかったのかよ！」

「残念でした。真由ちゃんのマネージャーには、いろんな人から依頼が来るんですつ。これはバスケット部の田中君に売……つと何でもない」

「てめつ、売り飛ばす気か！」

「真由ちゃんのリップ痕付きマフラー、いくらになるかな……なんてねっ」

「ぜってー許さねえ！」

身体から一気に力が抜け、重たいドアは緩やかに閉ざされる。私の心には、先程聴こえた会話がぐるぐる回る。

マフラー売るって、何……？

その前に、司君がすごく怒ってて……。

えつとえつと……。

真っ赤になった私を、ぐらぐら揺らす急行電車。

通り過ぎるグレーの街も、緑の山並みも、その向こうに広がる茜空も…… 各駅停車に慣れた私には、全てが速すぎて眩暈がしそう。

でも、降りちゃうなんてもったいないよね？

その日私は、七両目の乗客となった。

終着駅のホームで開く……私の恋の花。

## （後書き）

解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

2009年12月、ケータイ小説系サイト『ジョルダン・読者の広場』に投稿した作品です。（嬉しいことに二位という結果になりました。ありがとうございます！）ジョルダンだけに、お題は『電車』。いつもお題への切り込みが弱くなってしまうのですが、この作品では（直接的にも、比喻としても）満遍なく使い倒したつもりです。なおかつ、ケータイ小説ということで、古典的な少女漫画っぽい作品を目指しました。（自分が考えるケータイ小説系Ⅱ描写はライトで平易、モノローグ、体言止め、改行多め。当然糖度も高め！）あと今回は初チャレンジとして、内気なモジモジ系キャラを主人公に設定。自分が共感しにくいキャラを動かしてみ、あらためて小説の難しさを知ること。orz さらに力を入れたのはタイトル！最初に思いついたのは『各駅停車の恋』ってかなり直球…いつもはそのまんまなのですが、今回はタイトルにも比喻をw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0050z/>

---

七両目のリンゴ

2011年11月30日14時53分発行